

# 神学一出と向<sup>1</sup>

黄 南 徳

## 1. 序 論

神学とは何か？ この問いは、神学をするということはどこから出発するのか、すなわち「神学する場」を問うことを前提とする。神学が神の御言葉の意味を今日の具体的な生活と状況の中で探すものであるならば、さらに「神学する場」が大切である。なぜなら、キリスト教の神学はイエス・キリストの十字架と復活の意味を悟り、神の国を追求する実践的な学問だからである。だからこそ、アジア人として今日のアジアの状況の中で「神学する場」を見つけることは、アジア神学の発展のために非常に重要である。西欧神学が西欧の状況の中で経験し、理解した神を学問的に体系化して表現したのであれば、アジア神学はアジアの状況の中で出会った神を告白し、その経験をアジアの言語で記述し、学問的に発展させなければならない。

早くも台湾の神学者であるソン・チョンソン（宋泉盛）は、アジア神学が西欧神学のテーマをそのまま繰り返す神学ではなく、今日のアジアの現実で活動される神の創造的で拘束的な出来事を証言するものだとした。

「私たち神学の開拓者たちは、イスラエルの歴史及び西欧キリスト教の歴史から、私たちが住んでいるアジアの歴史に移動しなければならない。このように歴史的地平線を広げることで、私たちは各民族に向けられた神の神秘的な摂理をより広く、より深く把握することができる」<sup>2</sup>

1 本稿は、2022年4月1日に行われた本学神学部の開講講演会で発表した原稿を修正及び加筆したものである。

2 Choan-Seng Song, *Tell Us Our Names*, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1984の英語版が韓国語に翻訳された。宋泉盛（イ・ドクチュ訳）『アジア物語神学』、芬道（ブンド）出版社、1988、p.22。

「アジア神学の神学的課題は、世界の一部である私たちアジアにおいて、神がどのような計画をお持ちなのかを調べることである」<sup>3</sup>

「私たちの研究は続けられ、最終的には何世紀にもわたってアジアの民衆と共に歩んできた神の御心とその道を悟ることになるだろう」<sup>4</sup>

今日、私たちはアジア人として、アジアの状況の中でイエス・キリストの中に現れた神の救いの出来事を証ししなければならない。西欧社会の文化の中で現れた神の救いの出来事だけを見るのではなく、アジアの文化の中で経験した神の働きをアジアの言語で証ししなければならない。もはや西欧神学の理論と経験の枠組みの中に閉じ込められてはならない<sup>5</sup>。

西欧神学から出エジプトし、約束の地、カナンに向かって行かなければならないが、私たちにとってカナンはアジアである。もちろん、カナンはアフリカ人にとってはアフリカであり、ラテンアメリカ人にとってはラテンアメリカになるだろう。だから「神学：脱と向」は重要な意味を含んでいる。ここで「脱」は西欧の神学から出るという意味であり、「向」はアジアの神学へ進むという意味である。このような神学の「脱」と「向」のために、イエスの神の国運動から始まり、キリスト教の歴史の中で神学がどのように形成されてきたかを歴史的背景と共に簡単に見ていきたい。アジア人として私たちの神学する場を見つけるためにこれは必要な過程である。

---

3 Choan-Seng Song, *The Compassionate God*, Maryknoll, New York: Orbis Books, 1982の英語版が韓国語に翻訳された。宋泉盛（イ・ドクチュ訳）『大慈大悲の神』、芬道（ブンド）出版社、1997、p.110。

4 前掲書、p.110。

5 ラテンアメリカの解放神学者であるホセ・ミゲス・ボニーノ（Jose Míguez Bonino）は「解放の神学」ではなく「神学の解放」を主張し、西洋神学から独立することを強調した。

## 2. 本 論

### 1) 神の国とイエス運動

イエスはローマの植民地支配下にあったユダヤのガリラヤで貧しい大工の息子として生まれた。彼は植民地が置かれた政治経済的現実を見ながら成長し、30歳頃に洗礼者ヨハネに洗礼を受け、本格的に神の国運動を始めた。神の国を宣言する彼の周りにはいつも貧しい人、病を持つ人、疎外や差別を受ける群衆がいたが、彼らは「オクロス (ὄχλος)」だった。ギリシャ語で「ラオス (λαος)」は単純な群衆を意味し、「オクロス (ὄχλος)」は社会的に低い身分階層の人々を意味するが、イエスの周りにはいつも「オクロス (ὄχλος)」がいた<sup>6</sup>。

イエスは「オクロス (ὄχλος)」が、来たる神の国の主人であると宣言した。このようなイエスが繰り広げた神の国運動は、ローマ当局者の目から見ると不穏なもので、結局彼は当時の政治犯が受ける十字架で殺された。しかし、神はイエスを復活させた<sup>7</sup>。それはイエスの人生、彼が宣言した神の国が正しかったということ示されたのである。イエスの復活はオクロス (ὄχλος) にとって希望の出来事だった。そして、イエスの復活を目撃した弟子たちは、復活の証人となり、神の国の福音を伝え始め、教会を建てた。ペトロはエルサレムを中心に、ダマスコに向かう途中、復活の主と出会ったパウロは小アジアを中心に教会を建て、初代教会の歴史が始まる<sup>8</sup>。しかし、神の国の福音が伝われば伝わるほど、ローマの権力者たちと衝突し、ペトロやパウロのような伝道者たちは殉教した。

### 2) キリスト教の公認化

植民地を拡大していったローマは、征服した国々を効果的に統治する政策が必要だった。そこで宗教を利用しようと、A.D.313年コンスタンティヌス

---

6 韓国の民衆神学者アン・ピョンムは、オクロス (ὄχλος) の概念を解明し、イエスとオクロス (ὄχλος) の関係に注目する。

7 使徒言行録2:32, ローマの信徒への手紙8:11。

8 使徒言行録は初代教会の歴史を記録している。

(Constantinus) 帝はキリスト教を公認化した。その後、神の国のためのイエス運動から始まったキリスト教は、ローマ皇帝を支持し、権力を維持する帝国の宗教に転落し、政治と結託した宗教権力者がますます台頭するようになる。

### 3) 教父神学の発展

教父時代<sup>9)</sup>には、ユスティヌス (Justinus), リヨン (Lyon) のエイレナイウス (Irenaeus), テルトウリアヌス (Tertullianus), オリゲネス (Origenes), カルタゴ (Carthago) のキプリアヌス (Cyprianus), アタナシウス (Athanasius), カップアドキア (Cappadocia) 教父ら, アウグスティヌス (Augustinus) などの神学者が神学を発展させた。特にキリスト論において、キリストの先在論, 受肉論, 両性論など自分たちの神学的立場を発展させ、このような多様なキリスト論は伝統的な三位一体教義の形成の基礎となった。

### 4) 11世紀の東西教会の分裂

初代教会にはローマ, コンスタンティノーブル, アンティオキア, エルサレム, アレクサンドリアなど5つの教区があり, ローマ教区が中心的な役割を果たした。しかし, A.D.330年にコンスタンティヌスが首都をローマからコンスタンティノーブルに移し, 政治的かつ神学的な葛藤が始まるが, ここにはラテン語を使うローマとギリシャ語を使うコンスタンティノーブル間の政治的対立とフィリオクエ問題が主となる。結局1054年にキリスト教はローマカトリックと東方正教会に分かれ, このような教会の分裂は帝国の分裂でもあった。

### 5) 13世紀のローマ・カトリックの時代

ローマ・カトリック教会は聖職者と信徒は厳格に区別され, 祭司中心だった。教皇の「無謬説」は, 教皇だけが教義と信条の制定ができるようにした。カトリックの教権は教会を超えて政治的にも強力な力を持ち, 「教皇は太陽, 皇帝は月」という言葉があるほど, 世俗権力に対して影響力を行使した。したがっ

---

9 教父時代は紀元後約100-451年頃の期間を指す。

て、教皇権を理解することは中世社会を理解する重要な核心である。しかし、十字軍戦争の失敗以降、教皇権は徐々に弱体化した。当時の中世教会の神学をスコラ神学と呼ぶが、理性を教会の権威に服従させ、教義を理性で証明しようと努力した<sup>10</sup>。

#### 6) 14世紀のルネサンス（人文主義の運動）

14世紀にイタリアで始まったルネサンスは、15世紀を経て16世紀までヨーロッパにその影響が続いた。絵画、建築、彫刻など様々な分野で現れたルネサンスの影響は、古典哲学と古代宗教に対する活発な研究につながり、これは新しい文化を作る変化の原動力となった<sup>11</sup>。ルネサンスが全ヨーロッパに拡散してきた要因は、修辞学、歴史、道徳、哲学などの人文学研究を通じた人文主義運動と印刷術の発見、そして学問研究の揺籃となった大学の設立が大きな役割を果たした。これらの影響は人々の人間観や世界観にも変化をもたらし、中世の集団的な思考から個人的な思考へと発展し、人間の来世よりも現世の生活を重要視するようになった。理性を活用して世界と宇宙を探求し、人間の能力と歴史に対する楽観的な確信を持つようになったのもこの時期の遺産である。<sup>12</sup> こうした近代の合理性と人間の理性を強調したルネサンスは、宗教改革の背景となった。

#### 7) 16世紀の宗教改革運動

16世紀前からジョン・ウィクリフ（John Wycliffe）、ヤン・フス（Jan Hus）、ジロラモ・サヴォナローラ（Girolamo Savonarola）などの人物を通じて宗教改革の精神はあった。しかし、ドイツで1517年にマルチン・ルター（Martin Luther）がヴィッテンベルク（Wittenberg）大学の正門に宗教改革のための95カ条の提題を掲げ、改革の端緒を開いたが、彼は義認、恵みのみ、信仰のみ、キリスト

---

10 「スコラ」という名前は、中世に神学や哲学を教える場所が、カトリック教会や修道院に付属した学術機関（スコラ）であったことから付けられた名前である。

11 キム・ドンゴン『現代神学の流れ』、大韓基督教書会、2008、pp.18-19。

12 前掲書、pp.18-19。

のみを強調し、腐敗した教権と聖職者を批判した。その後、スイスでのフルドリッヒ・ツヴィングリ (Ulrich Zwingli) の改革運動、フランスから始まりジュネーヴまで広がったジャン・カルヴァン (John Calvin) の改革運動、スイスとドイツに広がった再洗礼派運動<sup>13</sup>、ドイツのトマス・ミュンツァー (Thomas Münzer)、スコットランドでのジョン・ノックス (John Knox) の改革運動などが続いた。このような宗教改革の背景には、当時16世紀のヨーロッパが地理的拡大と自然科学の発達、新しい人文主義の影響などで急激な社会変化を経験したが、この変化に比べ、カトリック教会は新しい時代精神についていけなかったことが根本的原因とも言われている<sup>14</sup>。そのため、ルネサンスと人文主義の影響を受けた時代の流れは、もはや教権が中心となる中世のカトリックの時代を受け入れることができず、宗教改革は腐敗したカトリック教権に対する批判とともに、新しい神学の台頭の可能性とともに近代世界を前進させる役割を果たすことになる<sup>15</sup>。

## 8) 18世紀の啓蒙主義

啓蒙主義は理性と科学の時代であり、人間の理性を重視し、理性で真理を把握できると信じていた。14世紀のルネサンスが小さな波であったなら、啓蒙主義は大きな波だった。このような啓蒙主義の特徴は、人間の理性が「思想の中心」となり、経験的分析方法で真理を探求できると信じていたため、いかなる宗教的な権威や前提をも否定した<sup>16</sup>。コペルニクス以降、継続的に自然科学の発展が行われ、この時期にガリレオやニュートンによってその成果が現れるようになった。そして、歴史学が発展し、客観的な歴史の史料さえあれば、歴史的な出来事が歴史の中でどのように起こったのか、また、これからどのように起こりうるかについての歴史の法則を示すことができると主張した<sup>17</sup>。それだ

---

13 再洗礼派の特徴は、「外的権威に対する全般的な不信、成人信者の洗礼の擁護、幼児洗礼の拒否、財産の共同所有、平和主義と無抵抗の強調」にある。アリスター・マクグラス (キム・ギチョル訳) 『神学とは何か』、幸福ある者、2022、p.116。

14 キム・ドンゴン『現代神学の流れ』、大韓基督教書会、2008、p.31。

15 前掲書、p.52。

16 前掲書、p.69。

17 前掲書、pp.69-71。

けでなく、この時期に天文学、考古学、人類学などが発達した。一方、このような様々な学問はキリスト教に疑問を提起した。キリスト教だけが普遍的な真理を所有しているのか、キリスト教が主張してきた真理が他の学問の真理の概念とどのような関係にあるのか、真理の概念が多元化する状況の中でキリスト教の真理の意味は何なのか。このような啓蒙主義の影響で、キリスト教も自分の真理だけが普遍的だと主張できなくなり、神学ももはや自分の論理だけが正しいと主張できなくなった。むしろ他の学問の助けを借りてキリスト教神学のアイデンティティを再確立することになった。自由主義神学はこのような啓蒙主義の影響で生まれた。

### 9) 19世紀の自由主義神学

17世紀末から18世紀に合理主義を基盤として、理神論 (deism) と自然宗教 (natural religion) を強調する流れが現れた。理神論者たちは「神は世界を自らが持続していくように設計したゆえに、世界はその後、継続的な干渉なしでも維持することができるようになった」<sup>18</sup>と主張した。つまり、神は世界の中でもはや働かれないということである。彼らは「宗教的な真理を理性の力で見つけて理解できると信じていた」<sup>19</sup>。そして、一部の哲学者や思想家たちは「宗教の真理と本質とは一体何なのか」という疑問を提起しながら、既成宗教の権威に挑戦し、自然宗教思想を主張した<sup>20</sup>。一方、自然宗教思想を主張する人々は、宗教的根拠を神の啓示だけに依存せず、「神の实在に対する理性的基盤、倫理的で道徳的確信、そして人間共同体の中で多様な形態で現れる自発性」<sup>21</sup>から求めた。このような立場では、すべての宗教は独自の真理を持つが、絶対的な主張はできない。このように、人間の理性を強調する理神論と自然宗教思

---

18 理神論は世界を時計として、神を時計職人として考えた。

Alister McGrath, *Christian Theology*, Blackwell, 1997の英語版が韓国語に翻訳された。  
アリスター・マクグラス (キム・ギチョル訳) 『神学とは何か』, 幸福ある者, 2022, p.436。

19 キム・ドンゴン『現代神学の流れ』, 大韓基督教書会, 2008, p.77。

20 社会契約論を主張したスイスの哲学者ルソー (Rousseau) が代表的な人物である。

21 キム・ドンゴン『現代神学の流れ』, 大韓基督教書会, 2008, p.78。

想は、キリスト教神学とも関連して問いを提起する。それは、人間の理性の役割に対する問いである。人間の理性は神学方法とどのような関連性があるのか。このような流れは18世紀の啓蒙主義の発展に影響を与え、その流れの中で自由主義神学が出てくる。自由主義神学は、人間の理性と合理性を基に、人間の状況から出発して神に問う構造を持つ<sup>22</sup>。

ここで人間の理性を強調する自由主義神学は聖書を歴史的な産物とみなし、聖書批評学の発展で聖書にある啓示と超自然的な要素は合理的に再解釈された。キリスト論では、史的イエス研究が活発に行われ、イエスの処女誕生、奇跡、復活などが否定されたり、合理的に解釈された<sup>23</sup>。フリードリヒ・シュライエルマッハー (Friedrich Schleiermacher)、アドルフ・ハルナック (Adolf Harnack)、アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer)、アルブレヒト・リッツェル (Albrecht Ritschl) などが代表的な学者であり、彼らは歴史が進歩するという楽観論を持ち、人間の理想社会をキリスト教が実現できると信じていた。

#### 10) 20世紀前半の新正統主義神学－カール・バルトを中心として

自由主義神学は歴史に対する理想主義、楽観主義、進歩主義の史観に基盤を置いていた。しかし、そのような歴史観は第一次世界大戦で粉々に崩れた。戦争を通じて現れた人間の好戦性と残虐性は、歴史が人間の希望のように発展しないことを明確に示した。それと同時に、自由主義神学の限界も示した。多くの自由主義神学者が第一次世界大戦を支持したのである。1914年8月に発表された戦争を支持する「93人のマニフェスト (文明世界への訴え)」には、当時の多くの神学者が参加し、19世紀の自由主義神学を代表するアドルフ・ハルナック (Adolf Harnack) が草案を作成した<sup>24</sup>。これは、人間の理性と能力で歴史の進歩を成し遂げ、理想的な社会を達成できるという自由主義神学の土台

---

22 正統主義神学方法論を「上からの方法論」と呼び、自由主義神学方法論を「下からの方法論」と呼ぶこともできる。

23 キム・ドンゴン『現代神学の流れ』, 大韓基督教書会, 2008, p.112。

24 前掲書, pp.121-122。



と信念が崩壊したことを示したものだ。このような危機の状況の中で、人間中心な自由主義神学を批判したカール・バルト (Karl Barth) の神学が出てきたが、それはまるで当時の神学者たちの遊び場に爆弾を投下したようだとと言われるほど、自由主義神学に大きな衝撃を与えた<sup>25</sup>。カール・バルト (Karl Barth) は、人間のすべての敬虔さと宗教性、倫理的達成を批判する中で、神と人間が違うことを明らかにし、自由主義神学の限界を指摘した。神の言葉と他者性を強調した彼は、人間が神を探すのではなく、神が人間を探すのだとし、啓示と宗教を区別し、啓示の超越性と神を主体とする弁証法的神学<sup>26</sup>を主張した。バルトは「神学とは、聖書を通して私たちに啓示されたイエス・キリストを土台とし、その上にキリスト教会の宣言を固めようとする学問である。神学は人間の状況や人間の問題に対する応答ではない。神学は神の御言葉に対する応答であり、神の御言葉はその性質上、応答を要求する。」<sup>27</sup>と述べた。このように改革教会の伝統を受け継ぎ、自由主義プロテスタント神学と楽観的な社会思想を批判したバルトの神学を新正統主義神学<sup>28</sup>とも呼ぶ。

この時期にカール・バルト (Karl Barth) の他にもルドルフ・ブルトマン (Rudolf Bultmann)、エミール・ブルンナー (Emil Brunner)、パウル・ティリッヒ (Paul Tillich)、テイヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin)、カール・ラーナーなどの神学者が活動し、20世紀後半にはユルゲン・モルトマン (Jürgen Moltmann)、ヴォルフハルト・パンネンベルク (Wolfgang Pannenberg)、ハンス・キュング (Hans Küng)、ジョン・コブ (John Cobb) などの神学者が活動するようになる。そして第三世界神学が本格的に登場した。

---

25 バク・マン『現代神学物語』, サリム, 2021, p.13。

26 弁証法的神学は「神と人間の関係を緊張と逆説、矛盾として把握し、神と人間の間に置かれた絶対的な間隔」を強調した。アリスター・マクグラス (キム・ギチオル訳)『神学とは何か』, 幸福ある者, 2022, p.184。

27 前掲書, p.184。

28 ここで新正統主義というのは、16-17世紀の改革派思想家から影響を受けたことを意味する。

## 11) 20世紀後半の第三世界神学

### (1) 第三世界神学とは何か

第三世界とは、第二次世界大戦後に西欧植民地主義から独立したアフリカ、ラテンアメリカ、アジアを指す言葉である。もちろん、第三世界という概念の定義も学者によって異なるが、植民地主義から政治的な独立と経済的發展を追求する民族主義という点では共通点がある。

### (2) 第三世界神学とは

第三世界神学とは、第三世界で生まれた神学である。第三世界のキリスト教徒たちが自分の状況の中でキリスト教信仰の意味を神学化したものである。過去二千年もの間、キリスト教の神学の歴史は西欧の文化と宗教の中で発展してきた西欧神学が中心であり、西欧人は西欧神学だけが唯一で絶対的だと主張した。しかし、第三世界の神学者たちは第三世界の宗教文化と政治社会の中で福音を理解し、神学の主題と方法論を探し始めた。つまり、西欧神学から「脱」して第三世界神学という名で、すなわちアフリカ神学、ラテンアメリカの解放の神学、アジア神学として発展した。このような神学の内容を見ると、次のようになる。

アフリカ神学は、アフリカの伝統的な宗教を神学的に解釈し、アフリカ人の宗教とキリスト教信仰との連続性を生かそうとするアフリカ伝統宗教の神学<sup>29</sup>、アフリカ神学<sup>30</sup>、南アフリカの黒人神学<sup>31</sup>などに分けることができる。このようにアフリカ神学は政治社会的解放を強調し、宗教文化的には土着化を強調する。

---

29 代表的な神学者はジョン・ムビティ (John S. Mbiti) である。

30 アフリカの伝統宗教の神学がキリスト教以前にアフリカの民族が持っていた独自の神体験に関する解釈であるならば、アフリカ神学はアフリカの教会のためのキリスト者の神学と言える。『道上のアフリカ神学』(African Theology in Route) がアフリカ神学に関する本である。『道上のアフリカ神学』は、アフリカ神学に関わる専門書籍である。

31 南アフリカ黒人神学は、南アフリカの特定の政治的状況のため、闘争的で政治解放的な要素が強い。デズモンド・ツツとアラン・ボエサクが代表的な南アフリカの解放神学者である。

ラテンアメリカの解放の神学は、ラテンアメリカの状況の中で、貧しい者と抑圧された者の解放を志向し、実践に対する神学的な批判的省察をしながら形成された。このようなラテンアメリカの解放の神学の特徴を「構造的な貧困の中で苦難を受ける人々の人生から形成された神学」、「社会変革(解放)を志向する神学」、「情熱的で預言的、終末論的な神学」、「初めから明らかに貧しい者たちの側に立つ党派性の神学」<sup>32</sup>と説明することができる。代表的な神学者としてレオナルド・ボフ (Leonardo Boff)、グスタボ・グティエレス (Gustavo Gutierrez)、ファン・ルイス・セグンド (Juan Luis Segundo)、ジョン・ソブリノ (Jon Sobrino) などがいる。

アジア神学はアジア人の歴史と文化の中に根付いた神学で、「アジア人による神学、アジアの宣教的現実問題をアジア人の立場で見る立場、そしてアジアの重要な宗教と哲学を援用した神学」<sup>33</sup>と定義する。多様なアジアの状況が示すようにアジア神学も多様で、インドのダリット神学、フィリピン of 闘争神学、タイの水牛神学、韓国の民衆神学、日本の部落民神学などがある。共通点は、アジア人の苦しみと挫折、そして喜びと希望から生まれた「状況神学」だということにある。代表的な神学者として、インドのM.M.トーマス (M.M. Thomas)、スリランカのアロシウス・ピエリス (Aloysius Pieries)、日本の小山晃佑 (Kosuke Koyama) と栗林輝雄、台湾のショキ・コー (Shoki Coe, 黄彰輝)、ソン・チョンソン (Choan-Seng Song, 宋泉盛) などがある。韓国の民衆神学者たちは民衆神学を取り上げながら紹介したい。

### (3) 民衆神学とは何か

#### ① 民衆神学の時代的背景

民衆神学は1970年代の韓国の政治経済的状況の中で形成された。軍部独裁の下、韓国は1960年代から産業化と工業化が始まり、農村の貧しい人々が都市に移住して貧民になったり、工場で働く労働者となった。労働者には低賃金政策を、

32 パク・マン『現代神学物語』、サリム、2021、pp.68-70。

33 ソ・チャンウォン『第三世界神学』、大韓基督教書会、1993、p.269。

農民には低農産物価格政策を強要し、経済的不平等が深刻化した。このような社会状況の中で、チョン・テイルという労働者が労働者の権利を主張して自殺した事件が起こった。彼の死は韓国社会に大きな衝撃を与え、労働者の現実を知らなかった神学者たちが民衆と一緒に闘い始めた。人権と民主化運動に参加した彼らは拘束され、学校から解雇された。このような状況の中で、神学者たちは民衆の苦難と希望、そして勝利の物語をテーマに民衆神学を発展させた。だから民衆神学は物語神学 (narrative theology) であり、行動神学 (doing theology) である。民衆神学者たちは大学から出て、路上で労働者、農民、貧民に出会い、彼らの苦難と闘争に共に参加しながら神学を発展させた。

#### ②民衆神学において民衆とは誰か

民衆とは、政治的に抑圧され、経済的に収奪され、文化的に疎外された集団を意味する。民衆神学は民衆が歴史の主体であると言う。だから民衆神学では民衆を英語の *people* ではなく、*Minjung* (民 *min*, 衆 *jung*) という固有名詞を使う。

#### ③民衆神学の聖書の典拠

旧約聖書では、エジプトで奴隷だったイスラエルの民の解放の物語と王権に對抗した預言者たちの活動が主要な聖書の典拠である。新約聖書では、ガリラヤのイエス運動と、イエスと民衆 (オク로스, ὄχλος), イエスの十字架と復活、初代教会などが主要な典拠である。

#### ④民衆神学者

代表的な民衆神学者としては、アン・ビョンム、ソ・ナムドン、ヒョン・ヨンハク、キム・ヨンボクなどがいて、彼らは民衆神学一世と呼ばれている。

ヒョン・ヨンハクは民衆文化に関心を持ち、特にタルチュム (韓国の伝統の仮面踊り) の中に現れた民衆の恨と社会批判の性格をテーマに神学を展開した。ソナムドンは伝説、ことわざ、民話など民衆の物語を通して、民衆の苦難と希望の未来を見つめる。ソ・ナムドンは「二つの物語の合流」という解釈学を通して、キリスト教の民衆事件と韓国の民衆事件が合流する過程を研究した。

アン・ビョンムは「マルコによる福音書」で使用されるギリシャ語の「オクロス (ὄχλος)」に注目する。彼は「オクロス (ὄχλος)」が一般大衆ではなく、貧しく疎外された特定の集団という意味で使われたと主張する。彼は韓国の歴史の中でオクロス (ὄχλος) の言葉に相当する概念が民衆であるとした。そして、イエスの救済事件を民衆解放の出来事として解釈する。

キム・ヨンボクは民衆の話を民衆の社会伝記と呼ぶ。民衆の社会伝記は、民衆が経験した物語、時代の物語である。具体的に彼は原爆被害者の話を通して民衆の社会伝記の意味を明らかにした。

#### ⑤民衆神学の課題

1970年代に形成された韓国の民衆神学は、21世紀が与える新しい問いに応答しなければならない。例えば、グローバル化と新自由主義、労働と環境、移民労働者、性的少数者、朝鮮半島の統一、アジアの平和、宗教間の対話などに神学的に答えなければならない。

#### (4) 第三世界神学の課題

第三世界神学は、大陸や地域によって神学的主題や方法、実践課題が多様である。しかし共通するテーマは「解放」である。ほとんどの第三世界の国が貧しいからである。特にアジアは多宗教と多文化の地域であるため、神学の主題が「解放」だけでなく「対話」になった。だからアジア神学は宗教解放の神学でなければならないと言われることもある<sup>34</sup>。

今日の第三世界神学は西欧神学から脱出し、独自の神学の間へと進んでいる。それだけでなく、アフリカ神学、ラテンアメリカ神学、アジア神学が連帯して第三世界神学の形成と発展に貢献している<sup>35</sup>。

34 スリランカのアロイスウス・ピエリス (Aloysius Pieries) は、貧困と宗教がアジアの特徴であると言い、アジアの宗教解放神学を発展させた。

35 第三世界神学者たちが1976年にアフリカで第三世界神学者エキュメニカル協議会 (Ecumenical Association of Third World Theologians) を結成し、これまで第三世界神学の発展のために連帯している。

### 3. 結 論：アジア神学，今どこに向かって行くのか？

今日という時間は過去から受け継がれてきた時間である。だからこそ、伝統は重要である。過去から伝わる伝統を受け継ぎ、それを継承することが歴史の発展である。キリスト教の神学も同様である。二千年のキリスト教の歴史の中で形成されてきた神学の内容を今日の状況の中で継承し、発展させることが神学する責任であり役割である。しかし、問題は西欧神学だけが神学の普遍性を主張することにある。しかし、神学の普遍性は様々な神学的記述を通じて獲得されるものである。それゆえ、ある特定の状況の経験だけを絶対視することはできない。様々な状況から出てきた「状況神学」が普遍性を語るることができる。それゆえ今は、西欧人が西欧の状況の中で形成した西欧神学だけに満足してはならない。全人類のための神の創造と贖いの働きを信じるなら、神の救済行為を様々な状況の中で理解し、神学化しなければならない。西欧の文化と哲学によって形成された西欧神学が、もはや普遍的な神学になることはできず、キリスト教神学全体の中心になることはできない。神学の多中心性と同時性が要請される。第三世界神学は、西欧中心の神学的帝国主義のバビロン捕囚から脱して、第三世界神学としての神学の主体性を確立しなければならない。アジア神学で言えば、アジア人の信仰体験をもとに、アジアの宗教文化的背景の中で、社会正義と解放を切望する民衆の言葉で神学を研究し、発展させなければならない。

20世紀後半から世界的に議論が活発に行われてきたポストモダン神学、プロセス神学、フェミニスト神学、生命神学、平和神学、生態系神学などもアジア人の視点で新たに評価し、神学的な代案を提示しなければならない。それはイエスが示した神の国に向けた人生と教えを「アジアの状況」の中で実践し、神学的な深みを増すことである。西欧の状況で発展した西欧の神学から「脱」して、アジア人が生きている生活の現場に「向」けて、その中でアジア人の言語と行動で、アジア神学を発展させていくことが、真に二千年のキリスト教神学の伝統を引き継ぐことである。